

現代化における伝統的家族制度の変化：山東省の 旧暦10月1日の「鬼節」の祖先祭祀を事例に

著者	王 新艶
雑誌名	比較民俗研究
号	29
ページ	5-16
発行年	2015-03-31
その他のタイトル	The relationship between social system and family values of modern China : Case study of the Gujie (Ghost Festival) ancestor worship in Shandong on lunar October 1st
URL	http://hdl.handle.net/2241/00127794

現代化における伝統的家族制度の変化 —山東省の旧暦 10 月 1 日の「鬼節」の祖先祭祀を事例に—

王新艷[※]

The relationship between social system and family values of modern China

This paper provided a folkloristic study on the relationship between social system and family values of modern china. Entered into the 21st century, "off-farm work" boom and "one child" policy have drastically changed the social system of modern China.

To discuss about the relationship between social system and family values in farming community of north China, we made a case study of "Ghost Festival", which is a Chinese traditional festival celebrated on 1st October of Chinese lunar calendar to make sacrifices to ancestors, in Linyi (Shandong, China). Nanpo's conceptions of "Mono- Koto- Kokoro" were used in this study to analysis the changes of the Ghost festival rituals on three aspects: altarage and spiritual money (Mono), people in the rituals (Koto), recognition on the rituals(Kokoro).

With the drastic changes in social system, traditional rituals have been simplified, people in the rituals have shifted from big family to nuclear family, and recognitions on rituals have become diversified. However, ghost festival is still continued, which shows its power.

キーワード：現代化 社会システム 家族制度 華北農村 祖先祭祀

はじめに

現代中国は、1960年代からの文化大革命期における人民公社時代、その後1980年代からの改革開放に伴う社会変化によって、村落組織や伝統的家族制度も大きく変化している。

中国家族研究の第一人者である潘允康は「伝統社会から現代社会へ移行する過程で、複合家族が解体し、直系家族が動揺する一方で、核家族が主流となりつつある。複合家族から直系家族、核家族への変化は、不可避な趨勢となっている」（潘1994:173）と指摘した。その趨勢に関して、同時代の日本人の研究者佐々木衛氏も中国の伝統的な家族の変化を推測していた。佐々木氏は「今や家族構造が不全状態にあり、その結果祖先の範囲も不明瞭なものとなり、ここに自らの位置が不確定となり不安が生じた」と述べた上で、さらに「その変化の根本原因は中国の政策にある。政治システムの家族への干渉・統制といってもいいだろう」と分析した（佐々木1999:94）。しかも、「こうした変化が一体どんな意味を持つか」という質問を提出した。佐々木氏より

※神奈川大学院歴史民俗資料研究科博士後期課程

すこし早めには、若林敬子氏が「一人っ子」政策という中国の人口政策から中国家族と社会構造の変容を捉えている（若林 1996）。若林氏は実際的には中国の社会制度と家族構造の関係を検討したが、中国家族制度の研究史では初めて「社会システムの変化」と「家族の変化」の因果関係を明確に指摘したのはやはり佐々木衛氏である。

その後、国の制度と家族の変化の関係について、中生勝美氏も華北農村を事例にして分析した。伝統的な中国の命名法は家族の輩行制と日常的な認識を反映できるが、新中国建立以来、戸口制度が施行されたら輩名の習慣が消滅しつつあり、女性も名前を付ける、と変化した。一方、中生氏も潜在的に伝統的な命名法が変化を規定していることを明らかにできたと思われる。即ち、家族の血縁関係と国の制度的な制約と歴史的な社会習慣のバランスを明らかにした（中生 1999：176—192）。松戸庸子も、婚姻法の変化から人民公社制度の解体と家族の復権を述べ、「小家族」を提示した（松戸 1999：3—33）。以上のように、潘氏の 1990 年代に指摘された観点であるが、その後また 20 年を経た。この 20 年間のうちにその趨勢はどういう風にならっていくのか、再論証する必要もあると思われる。

しかも、以上の研究はほとんど社会学や人類学的な分析であり、民俗学的には如何に『社会システム』と『家族観』を把握すればいいのか、本文が解決したい問題である。

また、佐々木氏指してきた中国の社会システム・政策としては、この 20 年間に於いて注目されたのは経済面の出稼ぎブームと政策上の「一人っ子」政策と考えられている。

まず、出稼ぎ問題は、90 年代から（1992 年）中国で「民工潮」という言葉が出現した（徐 2008）。2000 年に入ると、出稼ぎしている人数が急激に増加する。2011 年の統計によると、全中国で出稼ぎしている農民は 2 億 5278 万人に達する。たとえ三人核家族と計算すれば、家族ごとに一人が出稼ぎしていることを意味する。勿論、子供につれて全家族が出稼ぎしている家族は少なくない。民俗学の視点からみれば、民俗伝承主体としての農民がそのような大規模的に移動につれて、伝統的な民俗事象、家族形態にどのような影響を与えるのか、課題になると思っている。

次には、1980 年代に実施された一人っ子政策も 30 年間を経っていた。今、一人っ子世代はすでに結婚し、新しい家族を作る年齢に達している。かつて兄弟を持っている「複合家族」が「直系家族」や「核家族」に過渡する状況はどのように民俗学的に分析できるのか、もう一つの問題点になった。

従って、筆者は山東省臨沂市平邑県武台鎮水溝三村の旧暦 10 月 1 日の「鬼節」の祖先祭祀を調査した。この事例にして、21 世紀に入ると、出稼ぎと「一人っ子」政策を背景にし、民俗学の視点から中国華北農村において「社会システム」と「家族観」と関係を再検討すると思っている。このあたり「物」「事」「心」という概念を借用して、「鬼節」の儀礼を物的——供物、紙銭、事——祭祀する主体、心——祖先祭祀集団に対する認識という三つの方面の変化を整理し、現代化における伝統的な家族観はどのように社会制度の変化と伝統的な慣性の間に続けるのを明らかにするのは本文の旨である。

1. 調査地の概況及び「鬼節」

1. 調査地の概況

調査地は山東省の南西部に位置する山東省臨沂市平邑県武台鎮水溝三村である（地図1）。



地図1 ↓が指すのは水溝三村の位置

水溝三村に関して、1940年代から当時の満州へ出稼ぎに行った以来、出稼ぎ歴史はもう70年間以上に達した。1990年代から、東北、臨沂市、青島や大連などの東南沿海の都市へ行く人が日増しに多くなる。2011年末まで、以下の統計表1の如き、16歳—65歳の人の中で、出稼ぎ人は約78.4%にも達した。

また、「一人っ子」政策で、水溝三村では子供が女性しかない家族が123世帯あり、11.1%と占める。

人口数	16 - 60歳の人口数	比 率
	(県及び県外で出稼ぎ人口)	(出稼ぎ/16 - 60歳の人口数)
4,106	2,321 (1,820)	78.40%
世帯数	子供が女性のみの世帯数	比 率
	123	123

表1 2011年度の水溝三村における出稼ぎ人口

出典：水溝三村社区委員会における聞き取り調査より

2. 「鬼節」とは

旧暦10月1日は中国の「鬼節」の一つ（もう二つは清明節と旧暦の7月15日である）として華北地区の人々に重要視されている。儀礼を簡単に言えば、冬の入る前に祖先のために厚い布団を掛けるようにお墓の上に盛り土を直し、紙銭を燃やし、供物を供えることである。10月1日は冬の1日目なので、「送寒衣」という別称もある。各地の遣り方が違うが、中国の南北地方に

おいても存在している。

特に華北地方の旧暦 10 月 1 日の「鬼節」については、これまで多くの華北農村調査の資料の中で述べられている。一番多く記録されたのは満鉄調査団による農村実態調査と中国農村慣行調査である。中国農村慣行調査刊行会による編纂された『中国農村慣行調査 4』の中で山東省歴城県冷水溝荘、歴城県董家区、山東省恩県後夏寨の調査資料を整理してあり、すべて旧暦 10 月 1 日の『鬼節』に関する項目がある。それぞれ以下のように、「鬼節は何日か —— 七月十五日と十月一日、鬼節に墓参りをする、そして紙を焼く」（慣行調査 1955：59）、「『祭祖』：族譜によると楊家屯・路家庄・殷家庄の三庄の者が集まって祖先の祭をしたとあるが現在は如何 —— 十月一日だけ楊家屯の家廟へ参る」（慣行調査 1955：361）、「十月一日は鬼節。墳に詣って祖先を祭る。寒衣を送らず」（慣行調査 1955：437）と書いてある。

その後、佐々木衛をはじめとする日中両国の研究者による近代華北農村社会の調査資料の中には「清明節、十月一日、春節を迎える大晦日の午前中、それぞれ、先祖の魂を招いて、拝礼をする」という記叙も残されている（佐々木 1992：32）。ここで、山東省の曹庄において佐々木氏は「祖先祭祀」についてもっと詳しく聞き取りをした「問：誰が墓参に行くか。答：年をとったものは行かない。行くのはたいてい子供たちだ。問：こともが墓参する理由は、どうしてか。答：昔からの習慣である。」（佐々木 1992：100）従って、旧暦 10 月 1 日の「鬼節」の存在は疑いないことであるのが分かれる。しかし、「年をとったものは行かない」以上の詳細な儀礼の手順、意味などは言及されておらず、分析も行われていなかった。

では、水溝三村を事例にし、伝統的な「鬼節」の祖先祭祀の儀礼を時間的な順序で詳しく説明する。水溝三村では「鬼節」を別称にして「十・一節」と呼ぶ人もいる。

従来、「鬼節」の二日、三日前、即ち 9 月 29、30 日の時、別のところへ嫁に行った女性は線香、紙銭をもって実家（水溝三村）に戻る。「回娘家」か「走親戚」と俗称する。五代以内の祖先のために線香と紙銭を用意する。お持ち物は結婚している兄か弟の家に置く。もし男性の兄弟がいなければ、従兄弟の家に置いておくのも一般的なやり方である。これをきっかけにして、昼間、従兄弟たちが一緒に会食する。嫁に行った娘は自分が直接お墓のところに行けない。



写真 1 土饅頭の上で草が生きている土塊を押す

10月1日の当日、午前中、従兄弟たちは一緒に墓へ「填土」に行く。填土とは盛り土を直すということである。中国の華北農村では、墓の形態は土饅頭となっている。そのため、風雨により流失するために、毎年土を盛り直す必要がある。その作業が「鬼節」の一つ行事となっている。

嫁は家で供物を用意する。盛り土を直す時、土饅頭の一番上に必ず生きている草が付いている土塊で押しをする。草が根づきできるので、子々孫々が根を下ろすのを象徴する（写真1）。

午後12時以降、早ければ早いほどよく、三代以内の従兄弟たちは一緒に紙銭、線香、供物、爆竹などを持ってお墓参りに行く。お墓では、お酒を注ぎ、タバコ、線香を燃やしてから供え物を並べる。次に紙銭を燃やしながらその供物を供養する。最後は爆竹を鳴らすという手順で行われる。夕食、従兄弟たちが会食する。供養された食べ物はその会食の料理の一部分になる。生きている子孫と祖先が同じ料理を食べると、祖先の保護がもらえんと考えがある。

会食を終えると、一日中の祖先祭祀儀礼が終わる。儀礼の中で、供物から儀礼の担い手まで様々な決まりがあったが、現在、社会システムの変化に伴い、伝統的な決まりも変わりつつある。では、具体的にどのような変化であるか。

2. 現代化における「鬼節」祖先祭祀の変化



写真2 並んでいる供物 左から 鶏、魚、豆腐

1. 物的変化：供物、紙銭について

まず、供物のほうから入る。

嘗て、「鬼節」の時、嫁が家に決まった供物を用意するのが一般的なやり方であった。供物とは、調理できた鶏肉（中国語で「吉」の発音と一緒、一般的には一匹な鶏）、魚（余裕の「余」との発音と似ている）、豆腐（家族全員福がある意味）、豚肉は必要である。どちらにしても必ず調理済んだものであり（写真1）、嫁が午前中供物をそのまま食べられるように工夫した。祖先の立場から考えるととってもいいだろう。余裕がある家族ではお菓子、果物類も入れる。[神吃单、人吃双]（「神様は単数の料理を食べる、人間は偶数の料理を食べる」）という諺があるので、数量的には必ず奇数である。従った、料理なら一般的には三つ皿を用意する。お酒やタバコも準備している。

しかし、2000年以降、水溝三村において、夫婦「鬼節」の当日、嫁が工場での仕事をやり続け、一緒に出稼ぎに行っている場合が多くなってきた。供物を用意するか調理する時が無くなった。それに対応して、今、10月1日の当日地元の人はふたつ二つの方法を考えている。

一つは供物の象徴的な意味を守るように、魚や鶏や豆腐なども相変わらず用意している。ただ、スーパーで生の魚や鶏を買ってから、調理せずにお墓のところに持って行くようになった。写真3のように、一番右の魚はビニール袋において生で持ってくるのがはっきり分かる。もう一つは、祖先が食べさせやすいために、魚や鶏など生鮮物を代わりに、各種のお菓子や果物を用意していることになってきた。つまり、「鬼節」の節句を借り、祖先を供養するのを通して祖先に「孝行」を表し、縁起がいいことを貰う、という気持ちは変わっていない。

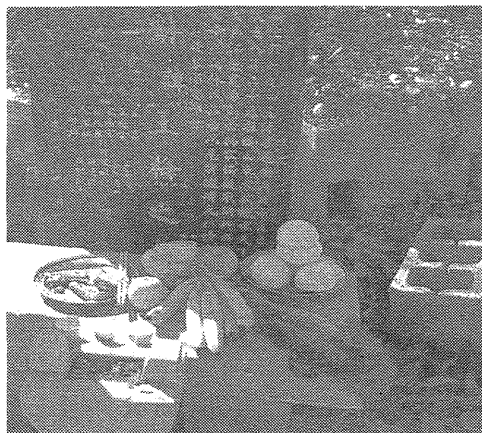


写真3 魚が生で供物にする

次、祭祀において、紙銭は祖先がその世での財産として重要な要素の一つである。従って、いくつのルールもあった。まず量的には、中国で夫婦合葬しているのも、もし両親の一人がまだ生きているなら、子孫が必ず紙銭を「半刀」を単位として燃やす。もし両親の二人とも亡くなったら、紙銭が多ければ多いほどいい。「刀」というのは、紙銭を数える量詞である。一刀とは25cm × 25cmの幅、100枚の紙を指す。

普段50cm × 100cmの紙を買って、自分で正方形に切る。切った紙銭の上に下の写真3のように道具で「○」紋を押す。

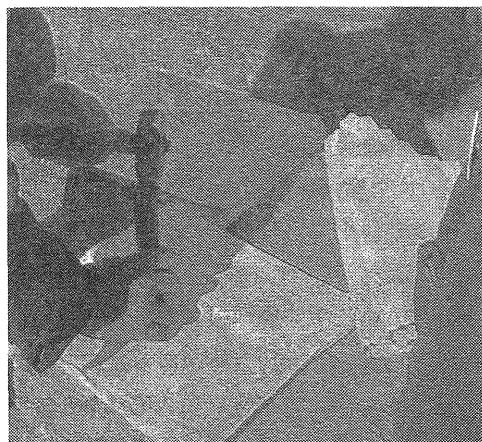


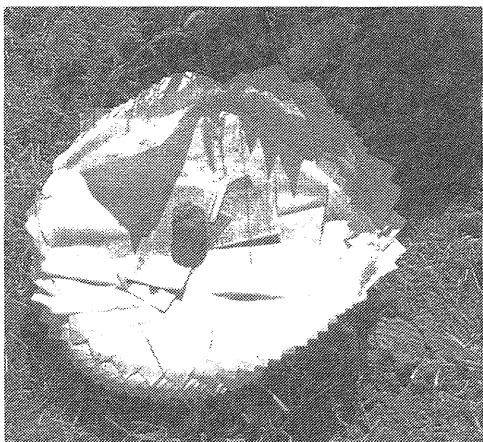
写真4 紙銭を作っている



写真5 店に売られている切り済みの紙銭

本物のお金は花模様があるので、紙の上で紋を作れば、金になれるという意味を持っている。

同じく、現在地元には自分で紙銭を作る暇がなくなる人が多くなり、技術を持っている人数も減っている。このため今はできた正方形の紙銭がセットとして売っているようになった。「一刀」とは約86枚になる。また本物のお金の形とまったく同じような偽紙幣があり（左の写真）、その



まま買って燃やすようになるのも一般的なやり方になった。

以上のように、出稼ぎなので手作り供物を調理する人がその時間少なくなり、買える商品の種類も多様化になるため、供物が調理済みの食品から生もの、お菓子、果物へ変わりつつある。紙銭も作って済みのものが便利で、もっときれいから人気がある。しかしながら、形が変わっている一方、供物の良い象徴意味もまだ保存している。しかも、種類の多様化及び紙銭の多様化が日増しに一般化になる。つまり、現代化において、地元の人は祖

先祭祀の伝統的な儀礼を活用し、現代なりの物を採用し、祖先と子孫の繋がりが薄くなるのではなく、もっと重要視であろう。

2. 事の変化：祭祀主体について

第1章の2節で書いてあげた先行的な調査資料と儀礼の流れからみると、水溝三村では伝統的な決まりが存在するのが分かれる。まとめてみると以下のようである。

当日①「一家子」の若い男性兄弟は一緒に祖先のお墓に行く。お墓の祭祀主体の単位は「一家子」である。一家子とは、同じ祖父を持つ、祖父—父—本人という三代にわたる範囲を示す。「鬼節」において、祭祀を共同で行う単位となっている。地元では「一家子人」として、一家子の成員を指す言葉もある。即ち、兄弟及び従兄弟と一緒に墓参りを行うということである。まさにこの祭祀は、自らが所属する「合同家族」の再認識の場ともなっているといえるであろう。

②若い既婚男性が墓参りを主導とする。佐々木氏の調査通り（佐々木 1992：100）、水溝三村においても、年をとった男性はいかない。そのため息子のうち一人でも結婚してしまうと、親はお墓には参らなくなり。それに変わって、既婚息子とその兄弟が主導するようになる。たとえ親が生きていても、息子が結婚すると自分は老人になったという意識があり、お墓参りには参加しない。代りに墓参りの主体は息子世代へと変化する。

③女性はお墓に行かない（「男祭祖、女祭神」）。いけない女性の範囲は二つに分けられる。一つは結婚している女性は当日婚家で準備するために、実家には戻れない。上述のように、一般的なやり方は9月28日、29日30日に実家に戻り、紙銭などを用意し、兄弟に頼み、「十・一節」の時お墓のところに持って行ってもらう。結婚したら、実家の人にとって、「一家子」の人ではない、他の家族の人になる。しかも、娘は結局結婚してから、他の家族の人になるという意識をもっているから、まだ結婚しない女の子も墓にいけない。もう一つは嫁も墓参りにいけない。当日、家で供物を用意するのが嫁の役割であった。

しかし、現代化において中国の社会システムも変わっている。経済的には若者男性が村落を離

れ、都市に出稼ぎに行く人が多くなっている。これにより、「鬼節」の際戻れない人が多くなっている。

さらには政策のほうで、一人っ子政策のため、子供が女性しかいない家族が増えている。この二つの現象と上述の三つのルールとは矛盾する。では、それにたいして、地元の人はどうに対応しているか、以下の事例を見ながら、明らかにしたいと思う。

事例に出てくる人物の年齢はすべて調査した時 2012 年を基準にして計算する。

①「鬼節」の当日、従兄弟が戻れない場合

事例 1：蔣ケイレン兄弟

蔣ケイレン氏は 25 歳の未婚男性である。彼の一番上の兄は 37 歳で、24 歳の時に結婚している。蔣ケンレンはこの兄と共に水溝三村で農業を行っている。蔣ケイレンさんは、農閑期には近隣の武台鎮でアルバイトを行っている。二番目の兄は少し離れた臨沂市平邑県城で出稼ぎを行っている。そのため、調査時には午前中の盛り土を直すのには間に合わなかった。

蔣ケンレンさんの父親には兄弟が 3 人おり、蔣さんには 4 人の従兄弟がいるが、現在すべて大連、青島に出稼ぎしているので、帰れなかった。そのため、午前中は蔣ケイレンと一番上の兄 2 人だけで盛り土を直していた。午後 2 人だけで祭祀儀礼をした。その後、二番目の兄は、午後 3 時ごろ帰ってきて、一人で墓に参った。

事例 1 から見ると、伝統的には、墓参りは、「一家子」を単位として、従兄弟共同で行われていた。それに対して、現在、従兄弟ではなく兄弟を単位として行われるようになってきている。さらには、兄弟同士でも一緒に墓参りを行うことが不可能になる場合も出てきた。その場合、「個人」で墓参りを行う事例が出てきている。「一家子」という祭祀を担う集団の範囲が次第に狭くなっていることがわかる。

②「鬼節」の当日、既婚若い男性が戻れない場合

事例 2：蔣ギグン夫婦

蔣ギグン氏は 62 歳で、妻は 60 歳である。この夫婦には息子が 2 人いる。長男は 2008 年前に結婚して子供が 1 人おり。現在は家族 3 人で青島に出稼ぎに出ている。そして次男も長男と同じ工場で働いている。そのため、「十・一節」の時には息子 2 人は戻ることができなかった。このような状況が 5 年間続いている。そのため、蔣ギグンさんは毎年墓参りを行っている。

さらに、2010 年には足が不自由になってからは、妻も一緒に行くようになった。

この事例で、原則としては、蔣ギグンさんの長男は結婚して祖先祭祀の担当者になったはずである。にもかかわらず、出稼ぎで帰省できないため父親が祖先祭祀を実施し続けている。原則上の担当者——既婚の長男と実質上の担当者——父親はズレが生じている。その際、原則に反する事態に直面した場合、結婚により祭祀を担う担当者が変わるという原則に修正を加えたことがわ

かる。

③女性しかいない家族が出る場合

事例3：丁ギョウ氏（女）

山東省の東営市出身の丁さんは30歳で、姉妹が6人、丁さんは四女であり、男兄弟はいない。2005年、水溝三村の孫チョウセンさんと結婚した。息子は5歳になった。

2006年に丁さんの母親が世を去った。2006年——2008年、両親の骨壺は当地の祭儀場に置いていた。現在、丁さんの姉妹たちは結婚して都市で働いているため、丁さんしか農村にいない。2009年、母親の骨壺を持って水溝三村に移動し、そこで土饅頭も作った。もともと東営市には旧暦10月1日の「鬼節」による祖先祭祀の風習はないが、お墓を水溝三村に移してから、そちらの風習に合わせて、丁さんが祭祀を行うようになった。

しかも、祭祀を行うのは丁さんだけでなく、丁さんの夫も一緒に行く。

事例4：王ショウカ氏（女）

王ショウカ氏は32歳で、一人っ子である。6年前8華里離れた夏庄へ嫁に行った。その後、2010年王さんの母が亡くなり、他の兄弟がいない。葬式及び毎年の祖先祭祀もすべて王さんと夫によって行われている。彼女には、従兄弟が2人いるが、鎮でのアルバイトで忙しいために、王さんは遠慮して頼めない。2011年から「十・一節」の当日も王さんが実家に戻って墓参りをしている。

事例3、4を通して、結婚している女性も墓参りできるようになったことがわかる。夫が出稼ぎで戻れない場合は、嫁が代行する事例は水溝三村ではよくあることである。それと反対に、従兄弟の間での協力関係は日増しに弱くなっている。

以上は水溝三村において特殊な事例ではない。第1章の1節で書いた村の概況から見ると、2011年末まで、16歳—65歳の人の中で、出稼ぎ人は約78.4%にも達した。また、子供が女性しかいない家族が11.1%と占める。従って、以上の事例のようなことは漸次的に一般化になるといえるだろう。調査した時、地元の人が兄弟だけか個人でも墓参り、女性も墓参りに行けるのに十分に受け入れる態度も気づいた。原因を聞くと、「個人でいけば、集合時間がいらぬし、便利だ」、「祖先祭祀は自分が祖先に対する尊重な気持ちで、形はあまり重要ではない」、「嫁さんがうちに来たら、一家子人になるから、夫が戻れないと、代わりに嫁が墓参りに行くのは当然だ」、「結婚しても、現在男女平等なので、実家に戻る墓参ってもいいじゃないか」と答えがあった。

従って、「鬼節」に墓参りする主体は、伝統的な単位である「一家子」が、出稼ぎの増加と一人っ子政策の実施により変化したことを見てきた。従兄弟と共同で行う祖先祭祀は次第に見られなくなり、直系家族、核家族が祖先祭祀を行う単位となってきた。姉妹しかいない場合や、女性

一人っ子の場合は、従兄弟の協力を得られなくなっており、女性が祖先祭祀を担当することも可能になっている。しかし、いずれにしても、祖先祭祀自体は維持されつづけている。

3. 「心」の変化：「祖先祭祀集団」に対しての認識

1999 年佐々木衛氏は中国山東省の春節における祖先祭祀を事例にし、「祖先祭祀集団」を図 1 のようにモデル化していた。△1 は祭祀責任者の中心として、従兄弟の△2 と共に、高祖▲5 までを共同で祭祀する。このモデルは「鬼節」における祖先祭祀にも適応すると思っている。ただ、佐々木衛氏が提出したモデル祭祀責任者が次代に変更する基準は△1 が活着しているかどうかである。△1 が死去してから、責任者は息子世代に変更する。一方、水溝三村の「鬼節」の祖先祭祀は息子世代が結婚してから祭祀責任者に変更するのがわかる。

しかし、現代化において祖先祭祀の責任者としても本節の（2）で述べたが、従兄弟から兄弟、個人に変化、若者から年輩人に変化、男性から女性にも変化という趨勢があるのがわかっている。基本的なモデルが様々な異形が出た。

これらの形はまだルールとして決まっていなかったが、地元の人々の心で黙認しているだろう。

さらに、祖先祭祀の対象範囲にも村人たちの認識も変わってきた。毛沢東時代において、「公墓林」制度が実施されていた。つまり、村の土地から固定的な部分を出して、「墓地」として使われる制度であった。その時代、同じ宗族の墓は輩行の高さにより東から西へ並んでいた。祭祀する時、高祖まで共同で祀るのは当然で、便利であった。1984 年に、村委員会が元「公墓林」の土地を桃栽培地に利用するため、「自分の耕地の中に墓を作ってもいい」という宣伝を出した。その後、風水も考えて、子孫が祖先墓地を自分で選ぶようになってきた。結局、両親の墓、祖父母の墓や高祖の墓の間にかなり距離が発生した場合がよくある。現在、若者たちが祭祀する時、往々両親や祖父母まで祭祀している。

調査した時、蔣姓族の墓地は今までも曾高祖から祖父母までの墓は並んでいるが。それは水溝三村に保存されているただ一つの宗族の墓地である。しかし、「鬼節」の当日、盛り地を直しも、祭祀に来る人が一人でもいなかった。墓はもう雑草がはびこっている。

モデルとしたら、基本的なモデル以外、祀る主体のほうは従兄弟から兄弟、個人へ、若者男性から年輩人へ、女性から男性から女性へ変わっていくだけではなく、祀られる対象の範囲も次第に狭くなるだろう。

おわりに

以上をまとめてみると、現代化において、出稼ぎと「一人っ子」政策の社会システムの変化に

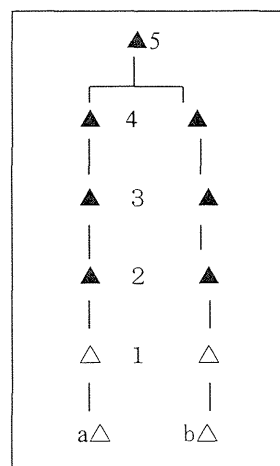


図 1 佐々木衛 1999 : 78 により

向けて、水溝三村の「鬼節」において祖先祭祀がどのように対応するのか、表で表すと、以下如き：

事項		伝統的なやり方	社会システム・政策	現代化の対応	
				変化	続ける
物	供物	種類が決まり、調理済み料理	出稼ぎで調理する時間がすくなくなり	種類が多くなる；生もの	象徴する意味変わっていない
	紙銭	自分で作る		できたものを買う	もっときれいなものが出た；量も多くなる
事	「鬼節」において、墓参りに行って祖先祭祀する主体	「一家子」の男性一緒に、従兄弟共同で行う	出稼ぎで従兄弟、兄弟が一緒に行くのが不可能になる	兄弟だけで行う 個人で行う	嘗てのルールに拘らなく、現実に適応する方法を考えて墓参りに行く。
		若い既婚男性を主導とする	出稼ぎで既婚男性が戻れない	年をとった父親が担う	
		女性はお墓に行かない	一人っ子政策や出稼ぎで、女性しかいない家族がある、従兄弟の協力関係も弱くなった	娘と嫁がお墓参りをする	
心	祖先祭祀集団に対する認識	祀られる：五代以内 祀る：三代以内	1960年代から「公墓」政策を実施する	祀られる：三代以内 祀る：兄弟か、個人	

要するに、現代化における社会システムの変化に伴い、伝統的な祖先祭祀は対応するため儀礼が簡略化し、祭祀の主体も従兄弟家族から直系家族、核家族へ変わりつつある。さらに中国華北農村の伝統的な祖先祭祀集団に対する認識も次第に多元化になる。しかし、外部の激変に対応するため祖先祭祀が調整しても、自体維持され続けている力の「強さ」が見られる。

参考文献

- 青山道夫 ほか『家族6 家族・親族・同族』弘文堂 1974
 内山雅生 「華北農村社会研究の成果と課題」、『駿台史学』40 1979
 大島一二 『中国の出稼ぎ労働者—農村労働者流動の現状とゆくえ』芦書房 1996
 佐々木衛編 『近代中国の社会と民衆文化』東方書店 1992
 佐々木衛 『中国民衆の社会と秩序』東方書店 1993
 佐々木衛ほか 『地域研究入門（1）中国社会研究の理論と技法』文化書房博文社 1999
 潘 允康 『変貌する中国の家族—血統社会の人間関係』岩波書店 1994

- 中生勝美 「中国の命名法と輩行制」上野和男・森謙二編『名前と社会』早稲田大学出版社 1999
- 松戸庸子 「中国の家族」清水由文編『変容する世界の家族』ナカニシヤ出版 1999
- 三谷孝 ほか 『村から中国を読む—華北農村五十年史』青木書店 2000
- 李 小慧 『中国における親族構造—特に宗族について』甲南女子大学研究紀要別冊 1991
- 路遙・佐々木衛編 『中国の家・村・神々—近代華北農村社会論』東方書店 1990
- 若林敬子 『現代中国の人口問題と社会変動』新曜社 1996
- 中国農村慣行調査刊行会編 『中国農村慣行調査』4 岩波書店 1955

新刊紹介

岳永逸著

『都市中国的郷土音声：民俗、曲芸与心性』

農業社会から工業社会・情報社会へ移行する転換期における中国の農村と都市では、伝統文化と現代文化の融合、多種の生活様式が所々に見られる。相声、二人転、口頭文芸、民間信仰、伝統的な祝日など、農村社会を母胎とした民俗文化が都市化のプロセスと共に、農村生活のみならず都会生活にまで浸透し、変容している。本書は、民間文芸、郷土宗教、都市民俗などの民俗事例を通して、長年にわたり中国の農村と都会におけるフィールドワークの現場で掘みとってきた現代中国人の心性を描く一書である。

著者は北京師範大学文学院准教授を務め、民間文芸、郷土宗教、都会民俗を専門領域とする気鋭の民俗学・文化人類学者である。著書に、『空間、自我及社会：天橋街頭芸人的生成及系譜』、『靈驗・叩頭・伝説：民衆信仰の陰面及陽面』、『行好：郷土的邏輯及廟会』などがある。

本書は、序文：城鎮化的郷愁、第一部分：城牆内外、第二部分：都市断章、第三部分：房舍小品、第四部分：現代民俗学之痒、おわりに：都市中国的郷土音声の構成をとっている。

岳は、「序文：城鎮化的郷愁」で郷愁の裏に隠れた中国発展の都市と農村間の歪みを提示し、郷土文化を重んじた都市化を主張して

いる。「第一部分：城牆内外」で、近年来勃興した「原生态」、「非物質文化遺産」などの保護運動、民間文芸の都市化に伴う政治化・商品化を憂慮し、民間文芸を郷土に復帰させるという主張を示し、「第二部分：都市断章」で、都市民俗としての人力車夫、口頭文芸、春節、幽霊・妖怪の昨今を顧み、都市化による我々のアイデンティティの混乱を郷土と民族性に求めようとした。「第三部分：房舍小品」では、親密な人間関係、文化伝承の自覚、多種の民間信仰に対する包摂など郷土社会における伝統を示し、「第四部分：現代民俗学之痒」では、民衆の主体性を主張し、現代民俗学が現代性を重視すべきものとし、中国民俗学を郷土民俗学と都会民俗学の二段階に分けて、郷土研究を承認する上で、都市研究への転換を提唱している。

中国民俗学は、ここ数十年以来、著しく発展を遂げたといわれる。転換期にある中国社会と共に、中国民俗学も転換期を迎えているといえよう。都市民俗学の方角を提出した本書は、解答が出されていないものの、中国現代民俗学研究の新たな動向として注目されるべき一書といえる。

(程 亮)

A5 判 340 頁 2015 年 1 月
中国人民大学出版社